

高岡市埋蔵文化財調査概報第12冊

高岡市埋蔵文化財分布調査概報 I

—平成元年度、木津地区・東五位地区の遺跡分布調査—

1990年3月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財分布調査概報 I

—平成元年度、木津地区・東五位地区の遺跡分布調査—

1990年3月

高岡市教育委員会

序

現在の高岡市街地の直接の出発点は、江戸時代初期加賀2代藩主前田利長による高岡城の構築と城下町の形成です。当時閑野と呼ばれていた約15mの小高い丘を中心としたもので、これが高岡台地です。ここには縄文時代の小竹藪遺跡や中川遺跡がみられるほか、北端部からは、旧石器時代の石器が採集されており、早くから人々の活動の舞台になってきたことが窺われます。旧石器・縄文時代に続く弥生時代の遺跡は、市街地の南西郊を中心に、石塚遺跡等数多く分布しています。

一方北西方を望めば、石川県の宝達山を中心とする丘陵は、高岡方面へも派生し、急崖となって富山湾へ臨みます。西山丘陵と二上丘陵です。この丘陵周辺にも旧石器・縄文時代の遺跡がみられます。また、多数の古墳群の所在地として著名なところであり、二上丘陵東麓の伏木台地は、越中國府跡・国分寺跡の所在地でもあります。

これら先人の歴史の足跡を示す貴重な遺跡を、的確に把握し、明示し周知させることは、埋蔵文化財保護行政上の基礎であると共に極めて重要なことです。

当市では、昭和58~62年度の5箇年に亘り、西山・二上地域において分布調査を実施し、遺跡の確認を行いました。その成果は先に報じた通りです。

この度、これに引き続いて、他の地域における遺跡分布調査を計画し、本年度から実施致しました。今後も計画的に一定地区ごとにを行い、市域全体の遺跡の分布状況の把握に努める所存です。

今回の調査におきましては、関係各位から、多くのご協力・ご指導をいただきました。厚く感謝の意を申し上げると共に、今後とも、ご鞭撻のほど宜しくお願ひ申し上げます。

平成2年3月31日

高岡市教育委員会
教育長 篠 島 満

例　　言

1. 本書は、富山県高岡市における埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。
2. 本調査は、平成元年度の国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査対象地は、高岡市内、旧市南部地域の内、木津地区と東五位地区である。
4. 現地調査は、平成元年11月6日から同年12月15日までの実働23日間である。
5. 本調査は、高岡市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事山口辰一が担当し、社会教育課長上田七郎、文化係長河合甚郎が総括した。
6. 本書の執筆は山口が担当した。

凡　　例

- 遺跡、埋蔵文化財包蔵地
- ▼ 新生・古墳時代遺物採集地点
- ▲ 古代遺物採集地点
- 中世遺物採集地点
- 近世遺物採集地点

調査参加者名簿

現地調査

上田順子、鳥田英子、高田えみ子、船木悦子、宮下真知子、吉久恵子
報告書作成

上田順子、高田えみ子、船木悦子、宮下真知子

高岡市埋蔵文化財分布調査概報 1

目 次

序

例 言

目 次

I 序 説	1
1. 高岡市の地勢	1
2. 調査経過	3
II 木津地区	7
1. 概 観	7
2. 各遺跡の様相	7
3. 遺 物	11
III 東五位地区	12
1. 概 観	12
2. 遺跡と遺物	12
IV 結 語	14

図 版 目 次

図版 1	遺跡	木津地区	1. 北木津遺跡（南） 2. 北木津遺跡（東）
図版 2	遺跡	木津地区	1. 西木津遺跡（南東） 2. 西木津遺跡（北東）
図版 3	遺跡	木津地区	1. 木津神社遺跡（南） 2. 木津神社遺跡（南東）
図版 4	遺跡	木津地区	1. 東木津遺跡（南） 2. 東木津遺跡（西）

挿 図 目 次

第1図	高岡市地形略図（1/20万）	2
第2図	分布調査事業区分図（1/20万）	4
第3図	調査対象地位置図（1/10万）	5
第4図	調査対象地区分図（1/10万）	6
第5図	木津地区遺跡地図（1/1万5千）	8
第6図	木津地区土器実測図〔1〕(1/3)	9
第7図	木津地区土器実測図〔2〕(1/3)	10
第8図	東五位地区調査風景	12
第9図	東五位地区遺跡地図（1/1万5千）	13

I 序 説

1. 高岡市の地勢

高岡市の位置

高岡市は富山県の北西寄りに位置する。北側は富山湾に臨む。東側は新湊市・大島町・大門町・小杉町と、南側は砺波市・福岡町と接する。また北西側は、能登半島の基部東側を占める氷見市である。市域の大部分は、庄川と小矢部川の2大水系によって形成された沖積平野である。砺波平野の北半部と射水平野の西端部に当たる。一方北西部には、西山丘陵と二上丘陵が走っている（第1図参照）。

庄川と小矢部川

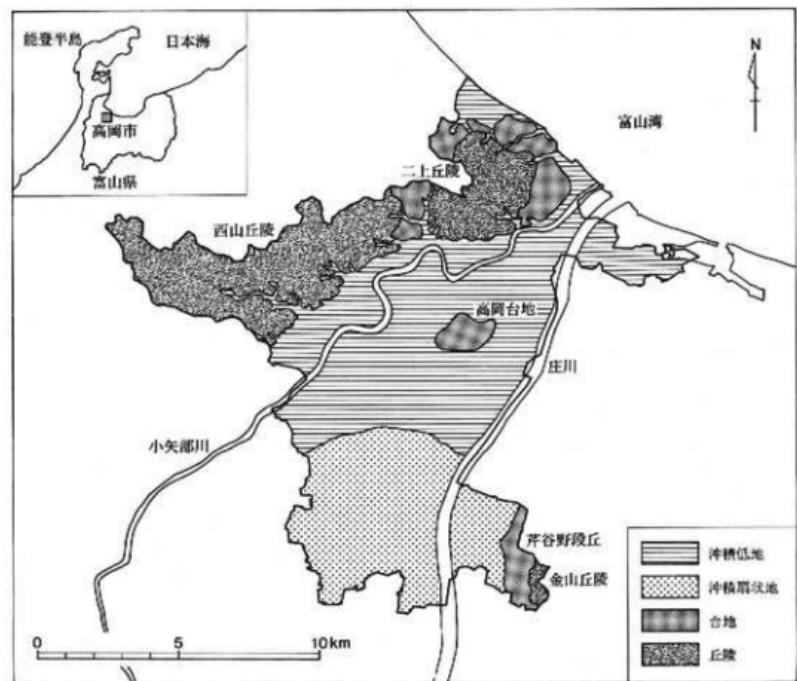
庄川は岐阜県の飛驒山地莊川村鳥帽子岳付近に発し、大小の河川を合流し、山間部に渓谷を形成して北流する。庄川町青島付近で山地を離れ新湊市より富山湾へと注いでいる。全長 132.6km を計る県下第2位の大河である。平野部では、青島付近を巻頂とする広大な沖積扇状地を形成している。この庄川扇状地は砺波平野の大部分を占め、高岡市域では、南部の戸出・中田地域を中心に戻がっている。現在の庄川は砺波平野の東端部を直線的に北流し、高岡市街地付近ではその東側に位置している。これは、江戸時代の加賀藩の工事による流路固定の結果である。江戸時代前期では高岡市街地の中心部を通り、木町で小矢部川に合流する千保川筋が本流であった。往古の庄川は、扇状地面を分流をなして奔流し、氾濫や堆積を繰り返しつつ、北西方の小矢部川へ注いでいた。主要河道は、総じて西から東へ移動していったようである。

小矢部川は加賀・越後境の両白山地北部の大門山に発し、福光町網掛で平野部へ出る。平野部を緩やかに曲流した後、高岡市伏木より富山湾へと注いでいる。急勾配が多い県下の河川の中において、緩流河川であり、水運に大きな役目を果たしてきた。また、合流する大小の河川も多く、砺波平野の排水河川となっている。高岡市の南西方に当たる、小矢部市・福岡町付近では、庄川の扇状地に押された形となり、扇状地の端部を侵しつつ平野部の西端部を曲流している。庄川扇状地の地表水の大部分と伏流水の一部は、小矢部川へ注いでいる。

西山丘陵と二上丘陵

高岡市北西部の丘陵は「西山丘陵」と通称されている。宝達山（637.4m）を中心に富山・石川両県下へ派生する宝達山丘陵東側の一角に当たる。石灰質砂岩や泥岩等の堆積岩を中心とする新第3紀層が主体となっている。三千防山（264.2m）を通り、東西に走る尾根筋が氷見市との境となっている。南東山麓には、いくつかの浸食谷が走っている。

二上丘陵は、一般には「二上山」と呼ばれている。主峰の二上山（=奥御前、273m）、城山（258.9m）、大師が岳（253.6m）、鉢伏山（211m）の峰々からなっている。地質は二上山ドー



第1図 高岡市地形略図 (1/20万)

ム構造と呼ばれているものである。北東側は海に臨む。西側は急傾斜となり、海老坂断層に至る。この断層はほぼ南北に走り、標高約60mを計る。これによって、西山丘陵と区分され、宝達丘陵の東端の一角でありながら、独立した形態の山塊となっている。この二上山を取り巻くように、段丘が発達している。

沖積平野

市域の平野部は、庄川による沖積扇状地部分と、庄川と小矢部川による沖積低地部分とに大別される。扇状地部分は、市域南部の旧戸出町・旧中田町を中心とした地域であり、標高は15~30mを計る。扇状地の端部に当たり、湧水地帯となっている。ここから北部域が、沖積低地の自然堤防帶・三角州である。扇端部から高岡市街地へかけての自然堤防帶は、自噴井地帯となっている。市域の北東端部で、庄川下流右岸の牧野地区は、射水平野北西端部の低湿地帯に当たり、東側はかっての潟湖である放生津潟（現在の富山新港）に臨む。また市域の北西端部で、二上丘陵

の北側の太田地区は、氷見平野の南端部に当たり、海岸沿いに砂丘がみられる。

台地

庄川や小矢部川の前身の大河、及び海面の変動がもたらした旧期扇状地や河岸段丘・海岸段丘から成るのが洪積台地である。市域では、二上山周辺、市街地中心部、中田地区東側において見られる。二上山周辺の台地は、二上山を取り囲むように、伏木台地をはじめいくつかの台地が存在する。これらは、中位及び高位の段丘面である。市街地中心部の台地は、高岡台地である。旧期扇状地の低位面がその漫食から取り残され、平野の中に孤立する形となったもので、標高約15mを計る。江戸時代には、ここを中心に高岡の城下町が形成され、現代に至っている。中田地区の東側の台地は、芹谷野段丘である。中位面で庄川に沿う形で南北に分布している。この段丘の中央北寄りが市域にかかっている。

丘陵

丘陵は、新第3系が主体になって構成されている地形である。市域では、西山丘陵とこれに続く二上丘陵、そして金山丘陵である。西山丘陵と二上丘陵は、市域における丘陵の主要なもので、市の北西部、小矢部川左岸に位置する。この丘陵の間は海老坂断層となりやや低くなっている。ここを氷見街道や国道160号線が通り、高岡と氷見とを結んでいる。いわゆる海老坂越えのルートである。金山丘陵は射水南部丘陵とも呼ばれ、射水平野の南部に亘るものである。市域の南東部の中田地区の東端にこの丘陵の一部がかかっている。この丘陵の西側は和田川の低地を挟んで、芹谷野段丘である。和田川は庄川とほぼ平行して北流し、庄川の下流部で合流する。かつては、放生津潟へ流れる河川であった。

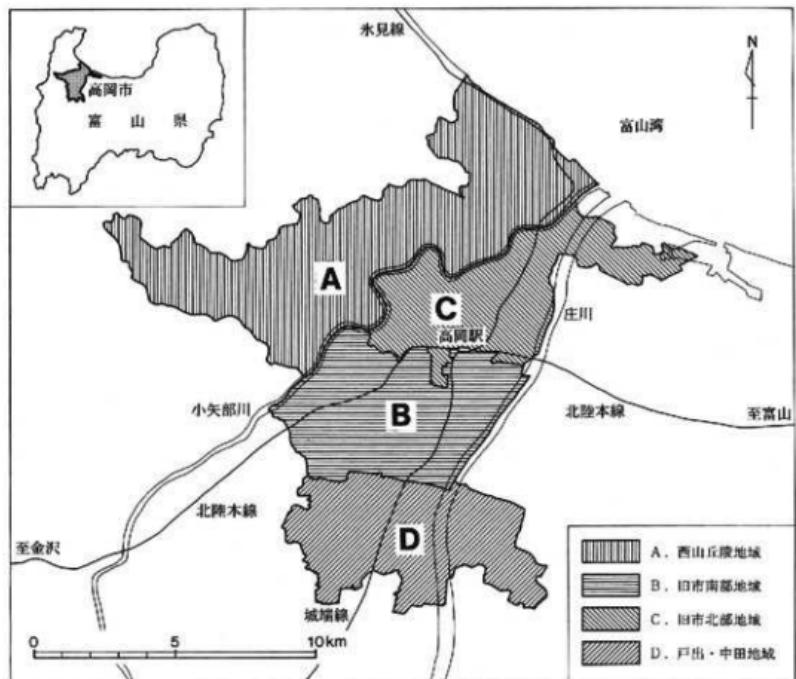
2. 調査経過

西山丘陵埋蔵文化財分布調査

小矢部川左岸一帯の西山・二上地域（西山丘陵・二山丘陵とその周辺の平野部）は、多くの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の所在地として知られていた。丘陵地の古墳群、山腹の横穴墓群、山麓の集落跡等であり、二上丘陵東麓の伏木台地は、越中国庁・国分寺等が位置していた所である。

昭和50年代に入り、道路工事等に伴い、桜谷古墳群・板屋谷内A古墳群・城光寺B古墳群等の調査が行われ、昭和57年には、土砂採集中に頭川城ヶ平横穴墓群が発見された。一方昭和53年以降、富山考古学会西井龍儀氏の踏査により、西山・二上地域は、今まで知られていたものを遙かに凌駕する古墳群の存在が判明してきた。当地域に対する各種の開発行為が進むと共に、高岡市は、西山地区での総合開発計画を検討していた。

このような状況の中で、西山・二上地域における遺跡の分布状況や内容の掌握が、埋蔵文化財の保護上急務となってきた。以上のことから、高岡市教育委員会では、昭和58年度～昭和62年度



第2図 分布調査事業区分図 (1/20万)

の5箇年に亘り、国庫補助を得て「西山丘陵遺跡分布調査事業」を実施するに至った。この調査では、丘陵地の古墳群、平野部の集落跡・散布地等の確認、主要古墳の測量調査を行った。各年度ごとの調査対象地区は以下の通りである。また、その成果は各年度ごとに『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』I~Vとして刊行されている。

- I. 昭和58年度、守山地区・国吉地区東端部
- II. 昭和59年度、国吉地区
- III. 昭和60年度、石堤地区・国吉地区西端部
- IV. 昭和61年度、太田地区・伏木地区
- V. 昭和62年度、二上地区・守山地区東端部

高岡市埋蔵文化財分布調査

西山・二上地域以外にも、高岡市域に数々の遺跡が存在することは言を俟たない。これら平野

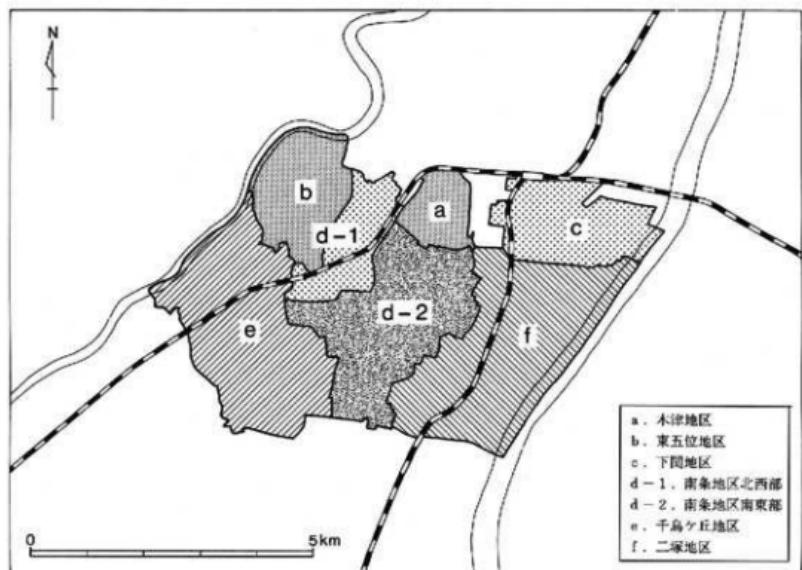
部が主体を占める地域でも、農地転用等数々の開発行為がなされつつあるのが現状である。これに対して遺跡認識の基準資料は、昭和47年発行の富山県教育委員会による『富山県遺跡地図』のみである。このような中で開発行為に対処して、埋蔵文化財保護行政の成果を掲げる上で、より詳細な遺跡の把握が慇懃された。

昭和63年度は準備期間とし、平成元年度より、西山・二上地域以外の市域における分布調査に着手することになった。これは、国庫補助・県費補助を得て『市内遺跡分布調査事業』として実施するものである。

高岡市は面積約15,000haを計る。この内約6,000haは、前述通り西山丘陵分布調査として、実施済みの地域である。すなわち、残り約9,000haが対象地となった。広い地域であるので、3地域に大別した。市域の南部に当たる旧戸出町・旧中田町を1つの地域、そして残りの地域は昭和30年以前に合併した町・村よりなるので、これをJ R高岡駅付近を基準に南北に分け、旧市南部地域、旧市北部地域と称することにした。これら3地域はそれぞれ約3,000haを計るものである（第2図参照）。3地域の中では「旧市南部地域」が、最も遺跡密度が濃いと判断されたので、この地域より開始することにした（第3図参照）。



第3図 調査対象地位置図（1／10万）



第4図 調査対象地区分図 (1/10万)

地区割りは、小学校区を基準とし、a：木津地区、b：東五位地区、c：下関地区、d：南条地区、e：千鳥ヶ丘地区、f：二塚地区に分けた。これを5つのブロックに区分し、1年で1つのブロックを調査して、5箇年で終えるように配分した。このため、やや大きい南条地区を、分離し、d-1：南条地区北西部、d-2：南条地区南東部とした。この区分について下記の通りである（第4図参照）。

- I. 平成元年度調査実施地区, a : 木津地区, b : 東五位地区
- II. 平成2年度調査予定地区, c : 下関地区, d-1 : 南条地区北西部
- III. 平成3年度調査予定地区, d-2 : 南条地区南東部
- IV. 平成4年度調査予定地区, e : 千鳥ヶ丘地区
- V. 平成5年度調査予定地区, f : 二塚地区

今年度の分布調査

以上のような経緯で、本年度は、木津地区と東五位地区の2箇所で分布調査を実施することになった。それぞれの地区における遺跡の分布状況は、第5図と第9図で示した。遺物が採集されても、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として設定するに至らない所は、その地点を明示した。

II 木津地区

1. 概 観

木津小学校下、約141haが調査対象地である。範囲は、北側がJR北陸本線まで、東側・西側はそれぞれ、千保川・和田川までで、南側が泉ヶ丘町地と下佐野集落の北側までである。北東方には高岡台地が位置しており、その間をかつて庄川の本流でもあった千保川が北流している。本地区の北東部、木津小学校・南星中学校が所在する南星町一帯は、千保川の氾濫源であり、標高6~7mの低地部となっている。これに対して、南西部、東木津や西木津集落のある一帯は、自然堤防の微高地（台地）となっている。標高は10~11mを計る。この微高地の崖下を新川が流れている。

本地区では、今まで「西木津遺跡」と「東木津遺跡」の2つの遺跡が周知されていた。今回の調査で「北木津遺跡」と「木津神社遺跡」の2箇所の遺跡を確認した。遺跡名は今回仮に付けたものである。この他埋蔵文化財包蔵地としての設定はしなかったが、遺物が数箇所から採集されている。

2. 各遺跡の様相

11. 北木津遺跡

千保川の氾濫源の低地部に位置している。木津小学校の南接部である。標高約6.5mを計る。遺物の採集された範囲は、北東~南北80m×北西~南北120mで、これを遺跡の範囲とした。現況は水田である。北側への拡がりは、木津小学校があるため不明である。採集された遺物は土師器のみである。小破片のみで図示できないが、狭い範囲ながら比較的多く採集している。平安時代~近世のものと考えられる。

12. 西木津遺跡

台地の縁辺部に位置している。西木津集落の南東部である、標高約10mを計る。現況は畑地である。中世を中心の遺跡とされているが、土師器・須恵器も採集されている。遺跡の範囲は点的にしか示し得ないが、当遺跡の南東側からも遺物が採集されている。これらは、中・近世の土師器・珠洲・越中瀬戸である。

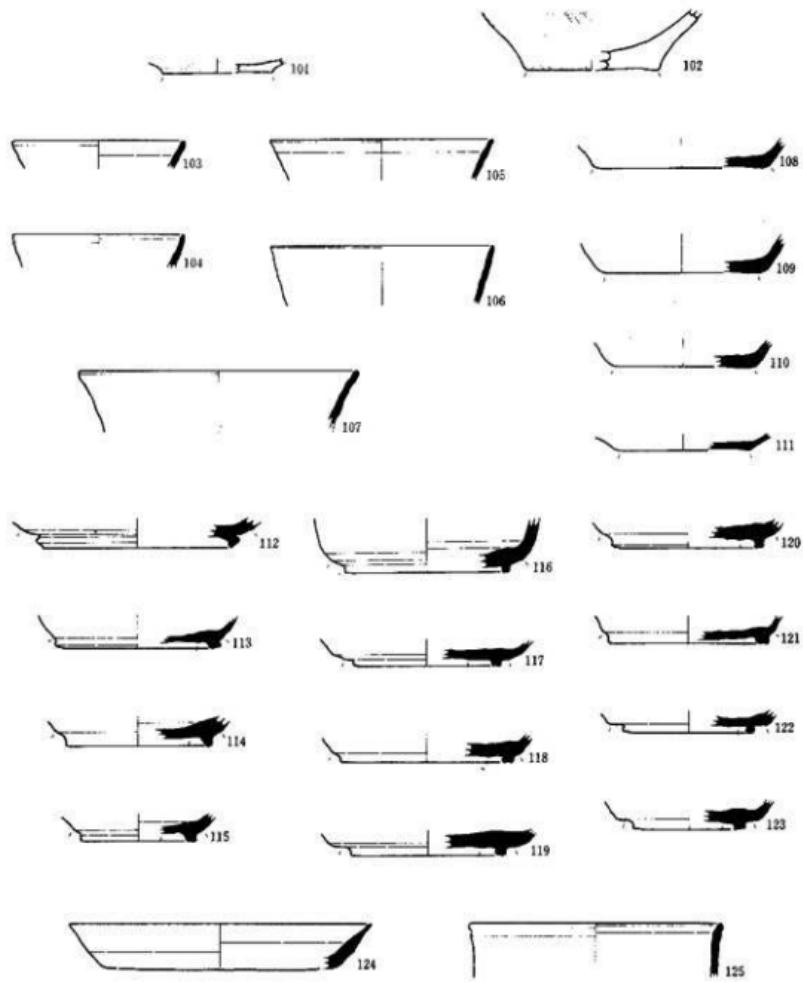
13. 木津神社遺跡

西木津集落の南側の台地上に位置している。標高約11mを計る。現況は水田・畑地である。木津神社を取り巻くように遺物が散布している。遺物の密度は後述の「東木津遺跡」に比べると少



第5図 木津地区遺跡地図 (1/1万5千)

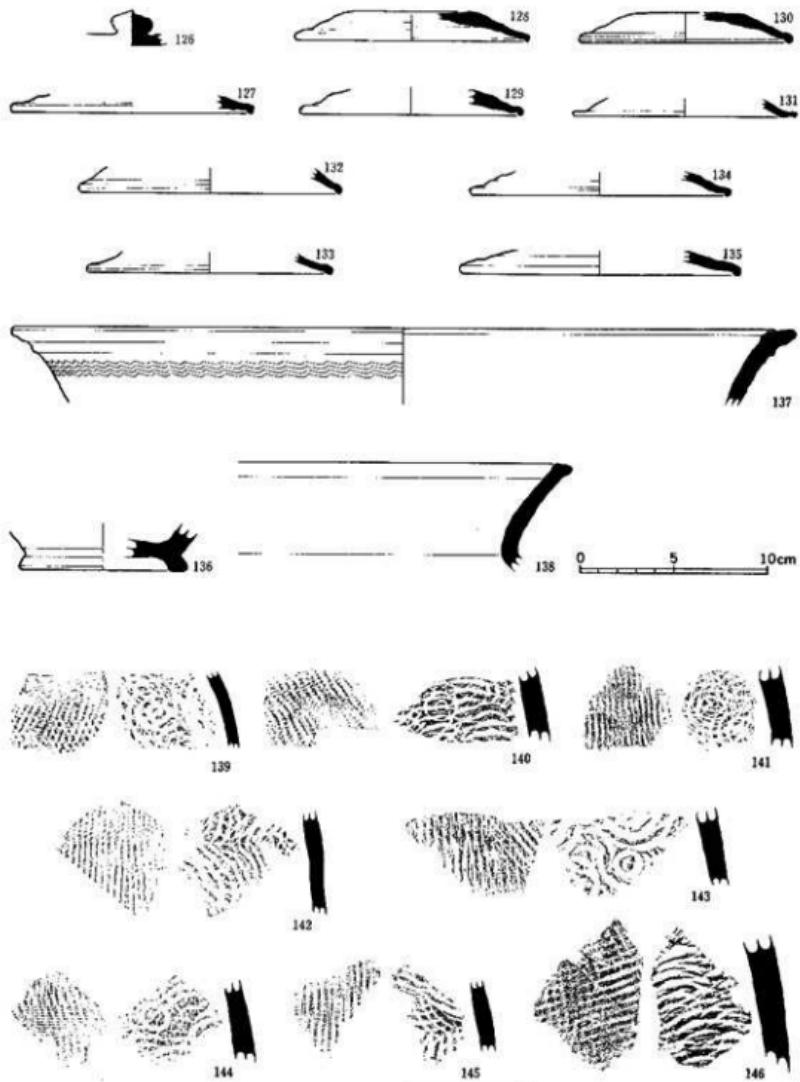
11. 北木津遺跡, 12. 西木津遺跡, 13. 木津神社遺跡, 14. 東木津遺跡



0 5 10cm

第6図 木津地区土器実測図〔1〕(1/3)

101, 102:土器器, 103 ~ 125:須恵器



第7図 木津地区土器実測図(2)(1/3)

126 ~ 146:須恵器

ないが、主要な地区を埋蔵文化財包蔵地として設定した。範囲は北東～南西 280m × 北西～南東 380m である。採集された遺物は、奈良時代～平安時代中期の土師器・須恵器で、これに中世の珠洲や近世の越中瀬戸等が若干量加わる。小破片のみのため、図示は省いた。

14. 東木津遺跡

東木津集落の南側、泉ヶ丘団地の北側の台地上に位置している。標高約11mを計る。現況は水田・畑地である。遺跡の範囲は南北250m × 東西600mである。採集された遺物は、土師器・須恵器が殆どを占める。特に須恵器が多い。これに中世の珠洲が若干量加わる。

当遺跡では、昭和62年3月に宅地造成に係る事前の発掘調査を高岡市教育委員会が行った。この調査の結果、幅約1.5mで南北に走る溝が1条検出された。この中から、須恵器を中心とする遺物が比較的多く出土した。発掘調査で出土した遺物や表面採集した遺物より、当遺跡の中心は、奈良時代～平安時代中期と言える。

3. 遺 物

東木津遺跡からは、一番多くの遺物が採集されたので、ここではそれについて述べる。特に須恵器が多く、土師器を一部加えて第6・7図として示した。珠洲等中世上器類も少量出土しているが省略した。

土師器 第6図の101, 102である。

杯 杯の底部片で101である。全面丹塗りされている。底部は糸切りとなっている。

壺 壺の胴下・底部片で102である。胴下部外面は刷毛目である。

須恵器 第6図の103～125、第7図の126～146である。

杯A・B 杯類の口縁部片で103～107である。

杯A 高台の付かない杯で108～111である。底部はヘラ切りとなっている。

杯B 高台付の杯で112～123である。

皿 皿の口縁部で124である。

鉢 一応鉢とした125である。どのような形態になるか不明である。天地が逆の脚部の一部かもしだれない。

蓋 杯類の蓋で126～135である。全体の形態が判明するものはない。つまみ部は宝珠形になる126である。その他は口縁部を中心としたものである。口縁部は短く下方へ折れ曲がるもののが大半である。131のように新しい様相を示すものもある。

壺 壺・壺類の底部片である。136である。

壺 壺の口縁部片の137, 138と胴部片の139～146である。137は口縁部外面に波状文が付く。

胴部片は、内面があて具の青海波文、外側が叩き目である。

III 東五位地区

1. 概 観

東五位小学校下、約403haが調査対象地である。北西側から北側にかけては小矢部川が流れる。本地区の北東端部でこの小矢部川に合流する祖父川が、南側から西側への境界となっている。西側は中川排水までである。かつての、西筋波郡東五位村にはほぼ該当し、総じて小矢部川と祖父川に挟まれた低地部分と言える。

本地区では、今まで「樋詰遺跡」が周知されていた。今回の調査で新たに加わった遺跡はない。遺物の分布状況については、後述する。

2. 遺跡と遺物

21. 樋詰遺跡

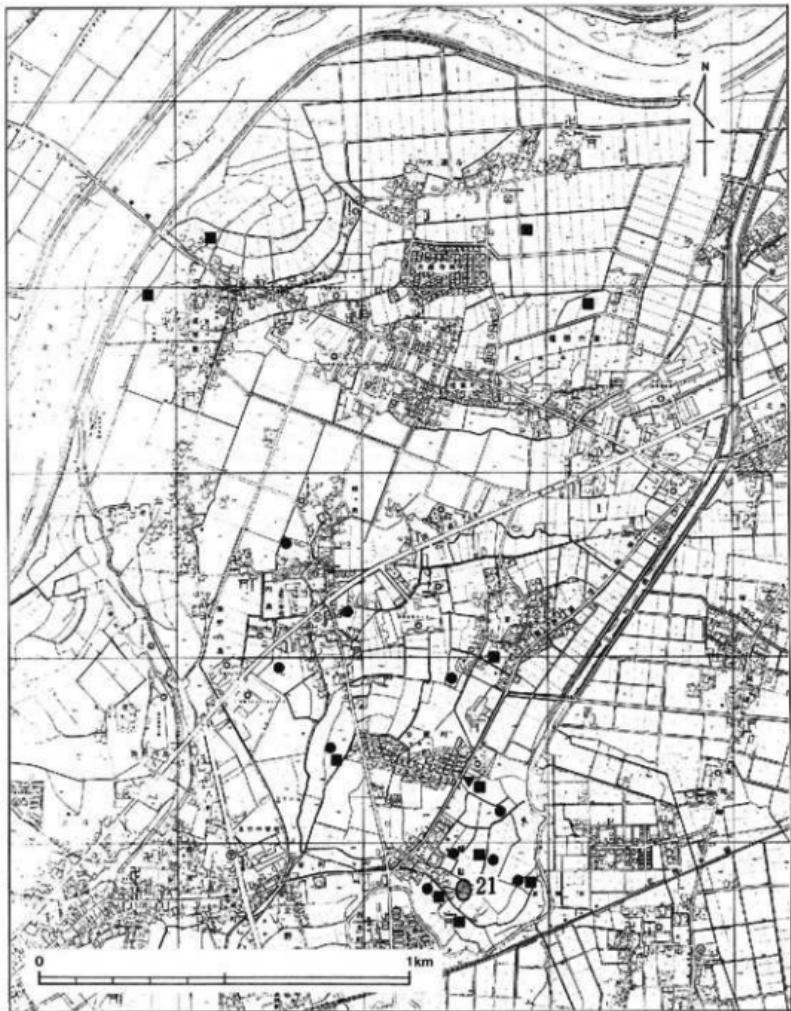
樋詰集落の南東側に位置している。標高約11mを計る。現状は水田・畑地である。以前に土師器・須恵器が採集されている。遺跡の範囲は今回の調査でも明確にし得なかった。付近の200～300mの範囲からは、中世の珠洲や近世の越中瀬戸等が採集されている。

遺物の散布状況

本地区からの遺物の採集量は多くない。第9図にてその地点を示したが、各々数点のみである。遺物は、中世の珠洲、近世の越中瀬戸を中心である。



第8図 東五位地区調査風景



第9図 東五位地区遺跡地図 (1/1万5千)

21. 調査道路

IV 結語

今回の分布調査の対象地は、高岡市街地の南西郊外に位置する、木津地区と東五位地区である。近年宅地化が進んできた地区であり、新興住宅団地も多い。

木津地区では、以前より知られていた東木津遺跡が注目される。今まで推定されていたより、範囲が拡がることが、今回の調査で判明した。この遺跡の南側には泉ヶ丘団地がある。この団地の造成工事中に、確認された遺跡が泉ヶ丘遺跡である。現在は、住宅の下になっている。一方、泉ヶ丘団地の東方及び南方一帯は、下佐野遺跡である。この遺跡も從来推定されていた範囲より北側へ拡がることは、確実である。すなわち、この3遺跡が間断なく繋がる可能性が出てきた。泉ヶ丘遺跡、下佐野遺跡の所在する地点は、今回の調査対象の範囲外であるので、本格的な踏査を行っていなく、検討もしていないので、今後予定している分布調査の中で、究明して行くつもりである。ここでは、この3遺跡周辺では、広い範囲から遺物が採集されることを指摘するに止めておく。

東五位地区では、穂詰遺跡のみ埋蔵文化財包蔵地と設定している。この遺跡については、穂詰にある神社、神明社周辺より、かって須恵器等が多く採集できたと聞き及んでいるが、今回の分布調査では、遺物の採集は微々たるものであった。初期莊園の比定地の問題もあり、機会をみて、再踏査、再検討を行いたい。

参考文献

- 和田一郎 1959『高岡市史』上巻 (高岡市史編纂委員会編) 青林書院新社
藤井昭二 1964「地質からみた射水平野の形成と放生津潟の変遷」『放生津潟周辺の地学的研究』富山地学会・第1港湾建設局伏木富山港工事事務所
富山県編 1970『富山県地質図、説明書』 富山県
坂井誠一他 1974『角川日本地名大辞典』16 富山県 角川書店
坂井誠一他 1982『富山県史』通史編III-近世上 富山県
藤井昭二他 1982『地下水利用等基礎調査報告書(解析編)』 富山県
邑本順亮他 1986『高岡の自然観察(総集)』 高岡市教育センター
豊田文一他 1988『南星町史』 南星町自治会
山下昇他 1988『日本の地質』5-中部地方II 共立出版



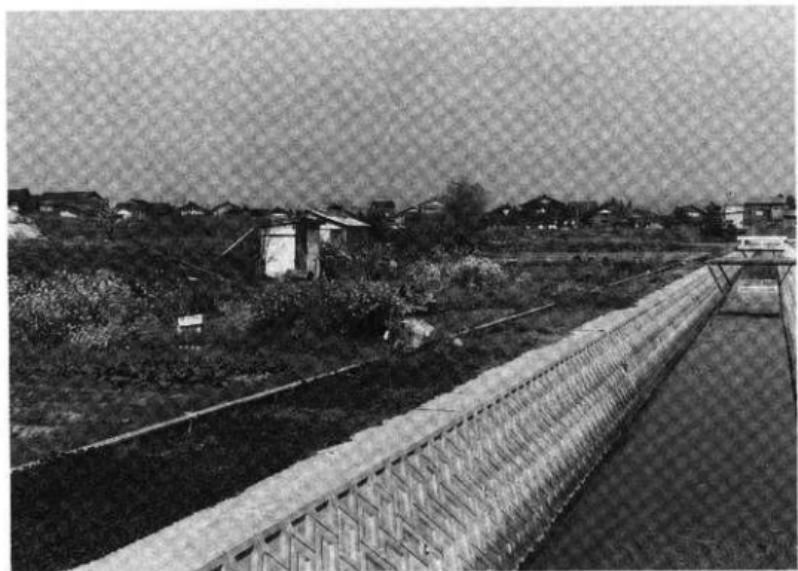
1. 北木津遺跡（南）



2. 北木津遺跡（東）



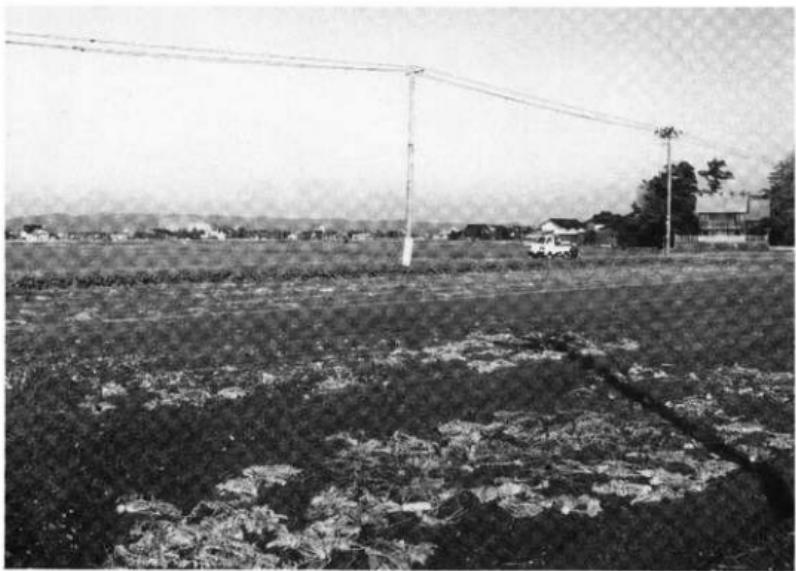
1. 西木津遺跡（南東）



2. 西木津遺跡（北東）



1. 木津神社遺跡（南）



2. 木津神社遺跡（南東）



1. 東木津遺跡（南）



2. 東木津遺跡（西）

高岡市埋蔵文化財調査報告第12冊
高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅰ

1990年3月31日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7-50
印刷所 小間印刷株式会社
富山県高岡市利屋町3

